

A児の表したもの

く表現の指導について考えるく

杉浦真紀子

(幼稚園教諭)

年中組から入園してきたA児は、初めての集団生活で、入園後しばらくの間は、母親と離れられずにいました。少しずつ園生活に慣れていきましたが、私に対して自分から要求してくることは少なく、教師から「何が好き?」「お外に行ってみる?」などと声をかけ、それに対してA児が首を振ったり、うなずいたりするといったやりとりが続いていました。

cvenjju

そんなA児に変化が訪れたのは、その年の冬のことでした。年長児が毛糸でマフラーを

作ろうと指編みを始めると、その様子を見ていたA児が、私にほそつと「あれ、しってる」と言ってきました。年中児にとってはちよつと難しいかなと思いつつ、A児の心が動いた瞬間を逃してはいけないと思い、年長児のところに行つて、毛糸を少し分けてもらうことにしました。A児の指に毛糸を掛けてあげると、A児はゆっくりと編み始めました。途中でわからなくなると、私のところに聞きに来て、そしてまた編み続けました。それが数日続き、家でもさらに編み足し、2メートルくらいの長いマフラーが出来上がりました。そ

の長く編まれたマフラーを首に巻き、端を引きずって歩く姿はなんとも誇らしげで、A児の言葉にはならない思いが、そこに表れていました。「Aちゃん、すごいね！」周りの声も聞こえてきて、A児の世界が少し広がっていくのが感じられました。



相変わらず言葉少ななA児でしたが、その頃から、「○○つくりたい」と言うことが増えました。A児が「つくること」に自信をもち、そこで自分を表現しようと動き始める姿を見て、私はA児の「つくること」をもっと支えたいと考えました。家族と水族館に出かけた経験から、イルカを作ろうと、材料と一緒に探していたこととす。私が「これはどう？」といくら見せても、納得がいくものに

出会うまでは決して首を縦には振らず、根気強く選ぶ姿があり、こんなふうには思いを強く表すようになつたこともうれしい発見でした。こうしてこだわりをもって作り上げたイルカをきっかけに、A児のそばには同じように作ってみたい友達が集まり、淡いながらもつながりが生まれていったことは、A児にとつての大きな転機だったと思います。

友達への思い

その後、新型コロナウイルスによる影響で、子どもたちの生活の場も休園を余儀なくされました。およそ3か月の自粛期間を経て、久しぶりに登園してきた子どもたちでしたが、憧れだった年長児とのお別れもできないまま、自分たちが園の中で一番大きい年長組へと進級していました。始業式でみんなとの再会を喜んだのも束の間、しばらくはクラスの半数ずつで登園することになり、仲良しの友達と

会えないこともありました。そのような中、A児は、S児の姿を追うようになりました。不安だった入園当初、園庭のお山と一緒に虫探しをしたことがあり、S児はA児にとつては拠り所となる存在のようでした。普段は仲良しの友達と元気に遊んでいたS児でしたが、分散登園になってからは少し元気がなく、A児は自分の意思で、そんなS児に寄り添おうとしたのかもしれませんが。

夏休みが近づいたある日、A児が保育室でひとりぼつんと座っていました。辺りを見回すと、S児は久しぶりに登園が一緒になった仲良しの友達と遊んでいるようでした。私は、A児の気持ちを察し、励ますつもりで「一緒に何か作ってみる？」と誘ったのですが、次の瞬間、A児の目から大粒の涙がこぼれて、首を振りながらうつむいたのでした。A児の中に芽生えた友達への思いは、言葉にしなくても十分過ぎるほど伝わってきました。この

時はとにかく、あふれてくる思いをありのままに表すことを受けとめようと、私はただそばで座っていました。

仲間と共にある

夏休みが明けて、全員での登園が再開し、子どもたちの暮らしに活気が戻ってきました。クラスでは、夏休みに捕まえたカブトムシやクワガタ、カエルなどを飼育ケースに入れて、園へ持つてくる人が増えました。また、園庭の草むらではバッタが飛び交い、子どもたちは虫捕りに夢中になりました。

そんな中、A児が、飼育ケースにカマキリを入れて持つてきました。友達に「どうしたの？」と聞かれ、「きのう、つかまえた」と、やりとりする姿に、私は正直、驚きを隠せませんでした。おまけに、友達が「見せて！」と集まってくると、A児はおもむろに飼育ケースに手を入れて、カマキリを豪快につかん



で見せました。周りは「お
おっっ！」とどよめき、A児
は次第に「カマキリを持つ
る人」として、一目置かれる
ようになっていきました。

秋が深まると、園庭の虫
たちは姿を潜め、代わって
ドッジボールが盛んに行わ
れるようになりました。A

児は、保育室と園庭とをつなぐ三和土^{たたく}に立つ
て、園庭の様子をうかがっていましたが、私
の誘いに乗ってはきませんでした。数日後、
ドッジボールに一区切りがついたとき、園庭
に転がっていたボールを手取るA児の姿が
ありました。私はすかさず、そのボールでA
児と二人でキャッチボールを始めました。狙
いを定めて投げようとするA児の姿には、力
強さがにじみ出ていました。再び、子どもた
ちが集まってきてドッジボールが始まると、

A児はそこに居続け、仲間たちとのドッジボ
ールに交じっていききました。そして、それは
翌日へと続きました。

また寒い季節が巡ってきました。A児の首
元には、今年、新たに編んだ長いマフラーが
巻かれています。

園生活の中で、子どもたちは身の回りのも
の、ひと、ことに出会い、心を動かし、自ら
こうしたい、こうありたいと、思いを表しま
す。その表現はさまざま複雑です。だから
私たちは、この子をもっと理解したい、その
ために何を支えるべきかと迷いつつも援助や
指導を重ねます。そこで大切なのは、表現す
る子どもの心もちであり、それを感受し、自
ら育つようにとかかわることだとあらためて
感じています。